

R8(2026)年 共通テスト本試『うつほ物語』現代語訳

仲忠(本文では「中納言」「君」)は、祖父が異国で天人たちより伝授された琴とその奏法を、母(本文では「尚侍のおどど」とともに大切に守り伝えてきた「琴の一族」である。本文は、仲忠の妻(本文では「宮」)が娘(本文では「いぬ」「児」)を出産した直後の場面である。

りうかく

I 中納言、「かの龍角は、賜はりて、いぬの

仲忠は、

「あの龍角〔=祖父から母へ伝わる名琴〕をいただいて、いぬ〔=生まれたばかりの娘〕の

まぼ

守りにしばべらむ」。

お守りにいたしましょう」と仰る)。

尚侍のおどど、うち笑ひて、「いつしかとも、はた。

仲忠の母は、

「(誕生したばかりで)早々にも、また。

さても、かやうの折には言ふやうがある」と

それにしても、このよう(出産の)時には、(そのように)言い伝えがあるのか」と

のたまへば、

おっしゃると、

「おほかたのことは、いかがばべらむ。

(仲忠は)「世間一般のことはどうぞしようか。(存じません。

ぞう

この琴の族ある所、声する所には、天人の翔りて

しかし、この琴の一族がいる所、

琴の音がする所には、

天人が(降臨して)翔けてきて

かけ

聞きたまふなれば、添へたらむとて。聞こゆるなり」。

お聞きになるといふことなので、(いぬの誕生にあたり、天人の加護を)添えようと思って申し上げるのだ」と答

ないしのすけ

尚侍のおどど、典侍して、大将のおどどに、

えた)。尚侍のおどどは、典侍「=女官の一人」に命じて、仲忠の父に、

「かの、おのが琴、ここに要ぜらるめり。」取らせむ
「あの、私の琴が、ここで必要とされるようだ。
あげよう(と思う)」

と聞こえたまへれば、急ぎて三条殿に渡りたまひて、
と申し上げなさつたので、（仲忠の父は）急いで 三条殿「（夫妻の邸宅）へ行きなさつて、
取らせておはしたり。
(その琴を)取らせていらっしゃった。

2 三の宮、取りたまひて、中納言にさし遣りたまひ

三の宮「（仲忠の妻の兄弟）が（琴を）お受け取りになつて、仲忠に

差し出しなさつた

つれば、唐の縫ひ物の袋に入れたり。児を懷に入れ

とこころ、（琴は）唐物の刺繡のある 袋に入つてゐる。

（仲忠は）いぬを 懐に抱いた

ながら、琴を取り出でたまひて、「年ごろ、この手を

まま、 琴を 取り出しなさつて、

「長年、

この琴の奏法を

いかにしほべらむと思ひたまへ嘆きつるを。後は知ら
どのようにしましよう「（誰に伝授しよう）と嘆いておりましたか。

ねど」などて、はうしやうといふ手はなやかに弾く。
ないけれども「などと言つて、「はうしやう」とい

曲を 華やかに

弾く。

声、いと誇りかににぎははしきものから、また、
(その)音色は、とても誇らしげで 賑やかだけれども、
また、

あはれにすゞし。ようづの物の音多く、琴の調べ
しみじみと、ぞつとするほど素晴らしい。あらゆる楽器の音色が多く（混じり合い）、琴と合唱した

合はせた声、向かひて聞くよりも、遠くて響きたり。
(ような大きな)音は、 目の前で 聞くよりも、 遠くで 響いている。

中納言、かかるべき曲を、音高く弾くに、風いと
仲忠が、このような(子の誕生に際して弾くのに)ふさわしい曲を、音高く弾くと、

風がとも

声荒く吹く。空のけしき騒がしげなれば、「例の、物、
荒々しい音を立てて吹く。 空の 様子が 騒がしげなので、

「いつものように、この琴は

手触れにくさぞかし。わづらはし」と思ひて、
(天変地異などの不思議な現象が起きて)扱いづらいよ。やつかいだ」と思つて、

弾きやみて、尚侍のおどとに申したまふ。

弾くのをやめて、

母に

申し上げなさる。

「今、曲一つ仕うまつらむとすれど、ア騒がしければ、
「もう一曲 演奏し申し上げよう と思うけれど、(空が)騒がしいので、(弾くことが)
えなむ。これに御手一つ遊ばして、鬼逃がさせ
できません。これに、あなた様の手で一曲お弾きになつて、鬼を退散させて

たまへ」と聞こえたまへば、

ください

と申し上げなさると、

「イはしたなげにぞあめる」。

(母は)「(私が弾くのは)体裁が悪いように思います」(とおっしゃる)。

君、「仲忠がためには、これにまさる折なむはべる
仲忠が、「仲忠にとつては、

これ以上の(演奏にふさわしい)機会はございません」

まじき」と聞こえたまへば、

と申し上げなさつたので、

ゆか

尚侍のおどど、御床より下りたまひて、
母は、 寝台の台座から 下りなさつて、

琴を取りたまひて、曲一つ弾きたまふ。

琴を お取りになり、

一曲弾きなさる。

その音、やうに言ふ限りなし。
その音色は、 まったく 言い尽くせない(ほど素晴らしい)。

とて、騒ぎ臥せたてまつりたまひつ。
と云つて、騒いで（仲忠の妻を）寝かせ申し上げなさつた。

琴は、弾き果てたまへれば、袋に入れて、
琴は、
弾き終わりなさつたので、
袋に入れて、

宮の御枕上に、御佩刀添へて置きつ。
守り刀を添えて置いた。
仲忠の妻の枕元に、

御佩刀 みはかし 守り刀を

添えて置いた。

宮の御枕
仲忠の妻の枕元に、

守り刀を 徒佛

て置いた。

オンライン
合格